

# ふるさとと瓦版

コロナ禍も収まりきらない3度目の春、大河ドラマ「鎌倉殿の13人」をご覧になっておられる方も多いのではないのでしょうか。

## 行橋の民話 「大橋太郎」と 鎌倉殿の13人

この物語は遠い鎌倉の話と思いきや、時空を超えて「鎌倉殿」につながる人物が、実は京築にもいました。行橋の民話として伝わる「大橋太郎」です。

「大橋太郎」といえば、「大橋」という地名の由来になった人として有名ですが、どんな民話が語り伝えられているのでしょうか。

むかし、鎌倉時代のはじめ、豊後の国に大橋太郎通貞みちさだつちゆう侍がおつてのお。地頭として領民にとても慕われちよつたち。ある時、太郎の元に、鎌倉の將軍様から呼び出しの書状が届いたそう。急ぎ太郎は妻と生まれたばかりの息子、一妙磨いちみょうを残し、鎌倉へ旅立つた。鎌倉についた太郎は謀反の疑いで捕えられ、土牢に閉じ込められてしもうたんよ。太郎の帰りを待つ妻も、家屋



源頼朝

一妙磨

大橋太郎通貞

敷を迫われ山中の小屋で一妙磨を育てちよつた。

ある吹雪の晩のことじゃ、旅の僧が一晚の宿を乞いに訪ねてきたんよ。旅の僧に父の姿を重ねた一妙磨は、「お父様は、鎌倉の將軍の元に出向いたまま、もう十年以上帰って来ませぬ。母と二人父の帰りを待つておるのです。」と太郎のことを話したんだと。すると旅の僧は、「一妙磨に「法華経」を渡

し、「ただ誠の心を持って法華経を論じなさい。必ずや大願は成就されるでありますよ。」と慰めた。その日から母と一妙磨は、毎日「法華経」を唱え、父の無事を祈り過したそう。

そして一妙磨が一二歳になると、母と二人で太郎の行方を探すために九州を飛び出し、神仏に祈りながら鎌倉まで辿り着いた。この日は鶴岡八幡宮で、將軍頼朝が参列する祭りが行われ

ちよつた。頼朝が信仰する伊豆山の僧たちが「法華経」を唱えておつたのじゃ。その声

に心動かされた一妙磨は声高々に法華経を唱和しはじめた。

澄んだその声の響きを聞いた頼朝は、「そなたの名はなんと申す。若き身でありながら、いかにして法華経を誦んじられたか。」と問うた

ち。一妙磨は、父のことを頼朝に話すと、社前にわかに騒がしくなり、一人の罪人が警護の者に引き立てられてき

たんよ。それは、大橋太郎じゃつた。髪も髭も伸び瘦せ衰えてい

たが、母のそばに立つ一妙磨を見て、「この世で妻と息子に会えるとは夢にも思わず、喜びに耐えない。長く獄中において、この度七里ヶ浜にて死罪となりとも悔いなし」と語つたそう。

父の言葉を聞いた一妙磨は、「將軍様に申し出願したいことあり。その上は、命召されることも露厭わず」と述べて父の命乞いをしたそう。

一妙磨の勇氣に心奪われた頼朝は、「そなたの父の罪は古きことゆえ、今更、虚実は明らかにはできぬ。しかし、法華経を唱え神仏を拝みながら九州から訪ねくるは孝行なり。法華経の心を持って死罪を許す故、親子共々新たな住まいを定めるが良い。」と申し

て三十銭も持たせてくれたつち。太郎親子は東海道を下り、難波の港から大里を経て苅田の宿場を過ぎ、今井津まで歩く途中、長峽川の河口の小さな村にたどり着いたつち。すると村人たちがやってきて、「旅の方々、どうぞ家に上がってお休みなされ。」と泊めてくれたそう。

村人のあつたかさ癒された太郎親子は、村の人たちにお返ししようと、小さな家を建て商いを始めたつち。

やがて、太郎親子を慕う人たちが豊後の国からも移り住み、賑やかな町になったつち。これが「大橋」の商業の始まりちゆうことじゃ。おしまい





『行橋市史』によれば、中世の大橋は宇都宮氏の給地として、荘園の米を保管する倉敷であったという資料も残されています。明治になると洋学を学ぶ大橋洋学校、大正時代になると百三十銀行も建てられ、京楽の文化の先進地でした。明治22年(1889)の合併により、大橋村は行事村、宮市村と合併し、行橋町となります。

掘削すると、刀剣や鏡などが出土した。地元の人たちは驚いて、太郎のものに違いないと喜び、大橋神社の境内に埋め大正14年(1925)『大橋太郎碑』ができたようです。」と語ります。大正7年(1918)に出版された『京都郡誌』には、豊橋柱（このまはしはしら）という文書が紹介され、大橋太郎の物語が記されています。



ところで、現在は民話として語り伝えられている「大橋太郎」とは、如何なる人物だったのでしょうか。昭和7年(1932)に田中智学によって書かれた『史劇大橋太郎』という脚本集には、筑後守平通貞という名で「再び平家の世に為さん者と密謀をめぐらし」と記されています。父の名は、平貞能。源平合戦の途中で出家し豊後の国に残ったという説もあるようです。太郎の出身には筑前、筑後、肥後と多説あるようです。

また、日蓮上人が残した遺文集『南條鈔』の一節には、「大橋太郎」や頼朝の他にも梶原景時らも登場します。鎌倉の光則寺の土年には、太郎が捕えられていたと伝わる横穴も存在することから、実在した人物だったのではないのでしょうか。

田中智学は、法華経の研究者であり、日蓮の理想を文芸で伝える「国性文芸」を起し、文学活動や演劇なども上演した人物だったようです。演劇として上演された「史劇 大橋太郎」の脚本では、「孝行の徳、法華経の徳。この二つの大きい徳には、頼朝も力及ばずして、遂に彼を許すことになったのぢゃ」と「鎌倉殿」に語らせています。行橋に伝わる親孝行の息子を持つ民話「大橋太郎」は、源平合戦の動乱の中で、人と人が憎み、争い、血を流し、そして祈り、許しあう壮大な物語でもあったのです。

春風に吹かれ、「大橋太郎碑」の向こうに見える鎌倉の風景を思いながら散策してはいかがでしょうか。



▲旧百三十銀行 行橋支店



▲大橋太郎碑

●参考文献

- 『ゆくはし歴史人物読本』2018 行橋市教育委員会
- 『京築風土記』2017 山内公一 幸文堂出版
- 『豊前路の民話と伝説』1980 宇都宮泰長 鶴和出版
- 『行橋市史中巻』2006 行橋市史編集委員会
- 『史劇 大橋太郎』1932 国性文芸会
- 『田版日蓮宗辞典』田中智学と国性文芸